

モモ果実赤点病の発生生態と防除対策

福島県農業総合センター 果樹研究所病害虫科

部門名 果樹—モモ—病害虫発生、病害虫防除

担当者 菅野英二・藤田剛輝・三瓶尚子

I 新技術の解説

1 要旨

モモ果実赤点病は、本県および和歌山県で発生が確認されている新病害である。被害果は商品性を著しく低下させるため、早急に防除対策が必要なことから、発生生態の解明や有効な薬剤の選抜を行ってきた。その結果、防除対策として果実への感染が多い6月下旬～7月中旬にダコレート水和剤1,000倍またはベルコート水和剤1,000倍を散布することが有効であることが明らかとなった。

- (1) 1998年に伊達地方の山間部のモモ園において、中生種の「あかつき」および晩生種の「あぶくま」で着色期ころに果実表面に赤色の小斑点を生じる障害が確認された(図1)。2004年以降には伊達地方の平坦部や福島市にも発生拡大し、早生種の「日川白鳳」以降に収穫される主な品種でも発生が確認されている。
- (2) 本病は、*Ellisembia* sp.による病害であることが明らかとなり、これまでウメシロカイガラムシの加害症状と誤認されてきたが、吸汁痕がないので識別できる(図4)。生育適温は25℃～30℃、生育温度は10℃～35℃である。
- (3) 伝染源は枝に形成された分生胞子(図2)であり、分生胞子は6月上旬～9月上旬まで飛散し、捕捉数は降雨後に多くなる傾向を示した(図3)。
- (4) 果実への感染は6～7月の梅雨期に多いことから(図5)、6月下旬～7月中旬に、ダコレート水和剤1,000倍またはベルコート水和剤1,000倍を散布したところ、いずれも防除効果が認められた(表1)。

2 期待される効果

- (1) 防除を実施した場合には、果実被害を無散布の約50%から10%以下に抑制可能である。
- (2) 本県ではダコレート水和剤1,000倍とベルコート水和剤1,000倍は、すでに灰星病およびホモプシス腐敗病の防除薬剤として使用されており、両剤の使用によって本病との同時防除が可能である。
- (3) 両者の診断ポイントが明らかとなったことから、診断に基づく防除指導が可能である。

3 適用範囲

本病の発生が確認されているモモ栽培産地

4 普及上の留意点

- (1) ダコレート水和剤、ベルコート水和剤は使用回数がそれぞれ3回であるため、使用回数を超過しないよう留意する。
- (2) 本病の伝染源は枝に形成されるため、薬液が主枝先端や樹冠内部まで到達するように、薬液量を十分確保して散布する。

II 具体的データ等



図1 被害果実(左;着色開始期、右;着色期)



図2 分生孢子

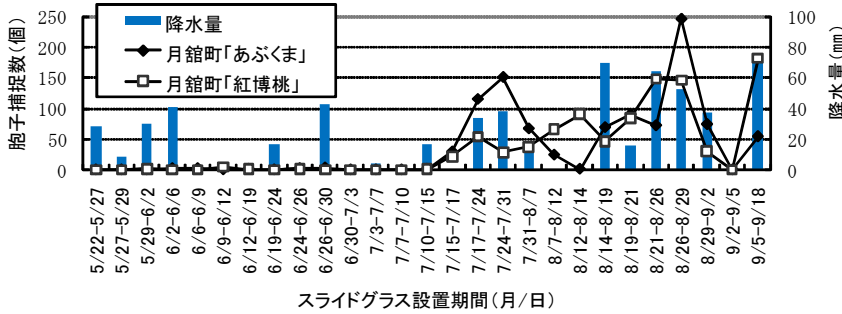


図3 果実赤点病発生樹における分生孢子の飛散消長(2008年)



図4 本病の症状と類似したウメシロカイガラムシによる被害果

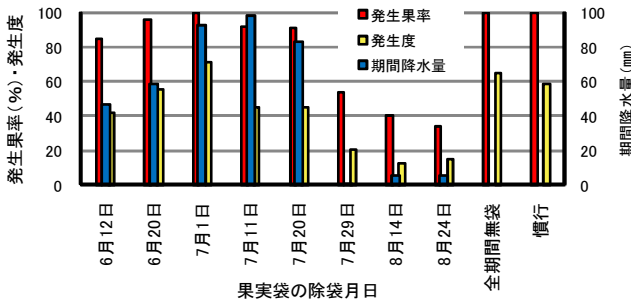


図5 曝露期間の違いが発生に及ぼす影響(2006年)
 注1) 品種は「あぶくま」を用いた。
 注2) 被袋は6月6日に、調査は8月30日に行った。
 注3) 慣行は7月10日に被袋、8月20日に除袋した。

表1 モモ果実赤点病に対する薬剤の防除効果(品種「あかつき」、霊山)

供試薬剤	希釈倍数	調査果数	発病果率(%)	発病度	防除価	薬害
ダコレート水和剤	1,000倍	150	7.3	1.4	91.8	-
ベルコート水和剤	1,000倍	150	6.9	1.2	92.9	-
無散布	-	150	47.3	17.4		

注1) 散布は2009年6月25日、7月6日、7月17日の計3回十分量散布した。
 注2) 防除価は発病度より算出した。

III その他

1 執筆者

三瓶尚子

2 研究課題名

モモ果実赤点病の発生生態と防除対策

3 主な参考文献・資料

- (1) 平成18年度～21年度農業総合センター試験成績概要
- (2) 平成19～20年度参考成果
- (3) 平成20年度病害虫発生予察特殊報第1号